

(3) 親または保護者と話す内容

親または保護者との話の内容についてアメリカと日本を比較した結果が、図3-①である。ここに挙げられた9項目の質問は、経済生活について(①貯金⑧予算化⑨値段比較)、一般生活について(③食事④スポーツ⑤麻薬⑦デート)、そして生活設計(②進学⑥人生の目的)について、というように大きく分類できる。ただし、この分類はそれぞれ深く関りあっている。例えば大学進学は中高生の目標の一つであるが、人生の大きな支出項目の一つであるということから、経済生活の会話と切り離すことはできない。一般生活についての会話は、心身の健康を保ち、経済的にも健全な生活を営むために必要であるが、予算化や値段比較といった経済生活についての会話となる場合もあろう。つまり、こうした会話を、生活の中で親と子がバランスよく行っているか否かは、家庭での金銭教育の下地ができているかどうかということになると言うてよいであろう。³⁾

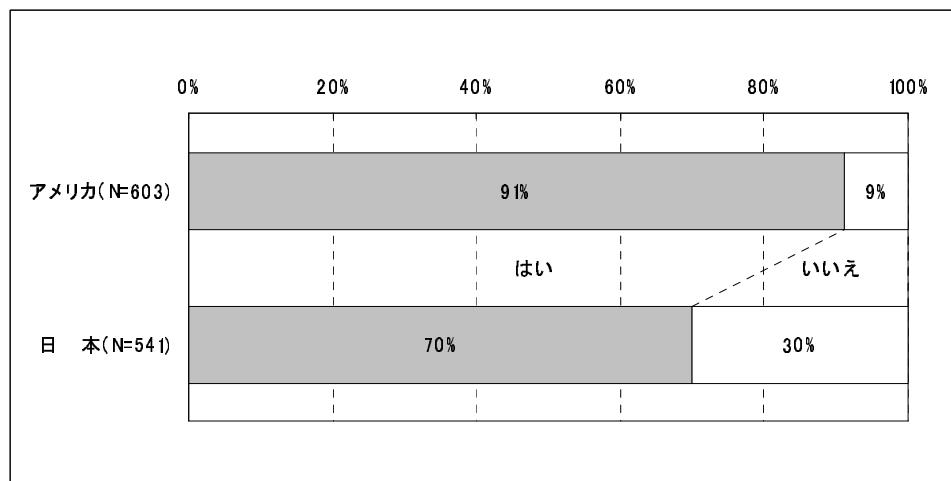
全体を見渡して、両国の最も大きな違いは、アメリカでは「はい」と答える生徒が、経済生活に関するいくつかの項目を除いて、ほとんどについて8割以上であるのに対し、日本では生活設計のうち「②進学について」のみが突出して多く、アメリカと並ぶ数字となっている。しかし、他はいずれもアメリカを大きく下回っている。この結果から言えることは、アメリカでは親子が一般生活から生活設計まで、バランスよく話し合っているが、日本では「進学」に偏っているということである。

以下に各項目の結果について述べることとする。

①貯金について

貯金について親と話すと答えた生徒は、アメリカは91%、日本で70%である。日本では16歳が77%と最も高い割合で話しているが、これはアルバイトの開始ということと関係があると思われる。後に見る経済的体験の有無についての質問で、「目的ある貯金や労働」という項目があるが、アメリカでは65%が「はい」と答えているのに対し、日本では34%である。貯金について話してはいても、「目標を定めた計画的な貯金」は、アメリカほど話し合われていないようである。

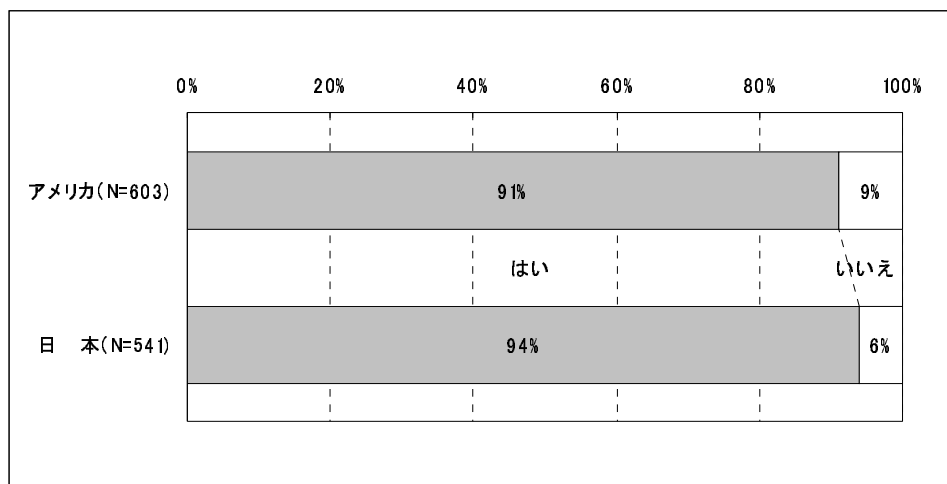
図3-①-① 親または保護者と話す内容
<貯金について>



②進学について

「進学について」は、日米共に9割以上が「はい」と答えているのだが、同じ生活設計に関する項目でも、「人生の目的について」は、アメリカでは84%が「はい」としているのに対し、日本では43%と大きな隔りがある。つまり日本では、進学など進路を親と話し合う際に、将来の目標といった生活設計を話し合うことが、アメリカに比べると不足しているといえよう。また日本では、進学費用は保護者が負担することが当然のように考えられがちであるが、アメリカでは、子どもにもアルバイトからの貯金や、奨学金の獲得など、費用を準備することが求められている。²⁾「進学について」の話の内容が、この点からも大きく違っていることが推測される。

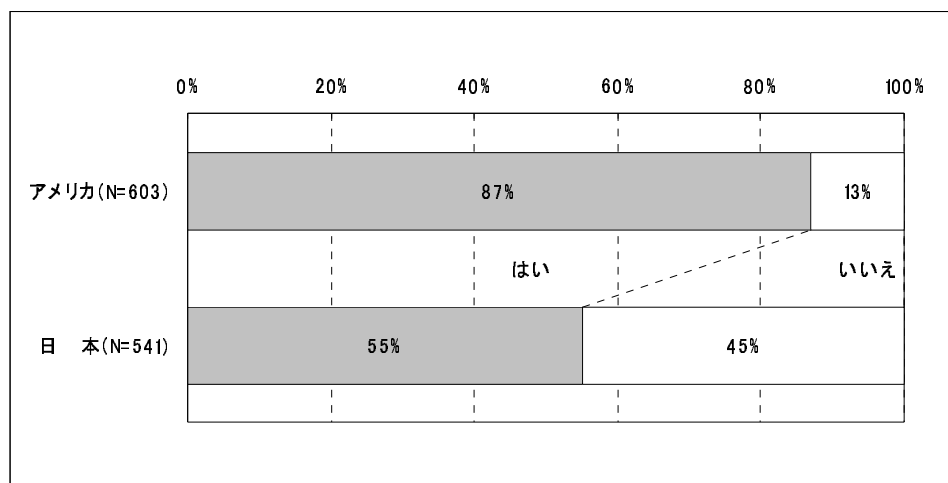
図3-①-② 親または保護者と話す内容
<進学について>



③健康的な食事について

アメリカでは87%が「食事について」親と話すと答えているが、日本では55%と低い割合になっている。アメリカでは食事やスポーツなど、中高生の一般生活の中で、大きな部分を占める内容についても、貯金や進学に変わらぬ割合で話しているのである。きちんとした食生活を送ることは、健康維持のために不可欠であるが、年齢が上がるに従って、外食やコンビニ弁当を購入する機会も増えてくる。親子の間で食事についての会話をする時に、意識して限られた予算でバランスのよい食事をとる方法を教えることは重要であろう。そしてそれは、やがて一人暮らしを始める際の大きな手助けとなるだろう。

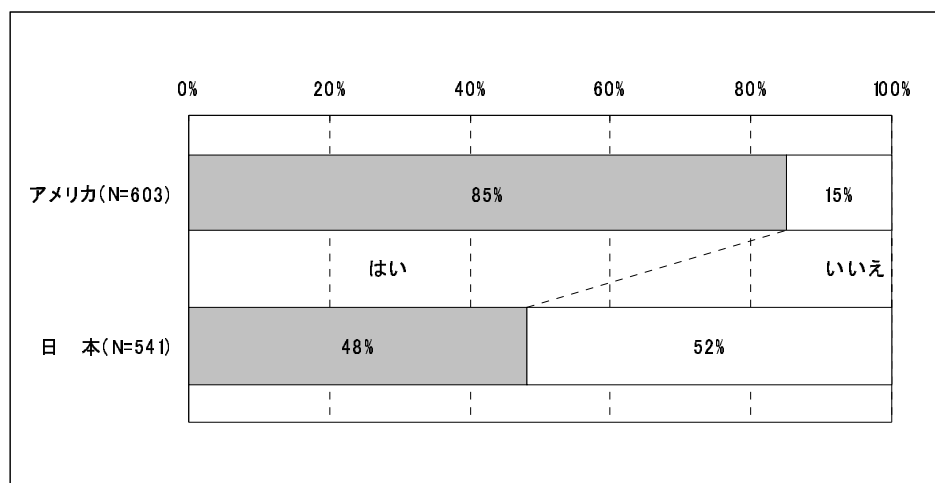
図3-①-③ 親または保護者と話す内容
 <健康的な食事のとり方>



④スポーツについて

この質問も③「食事について」と同様、心身の健康を維持することの重要性を認識しているかどうかを問うものと思われる。日本では「はい」と答えた生徒は半分に満たないが、アメリカでは85%と高い割合で話している。

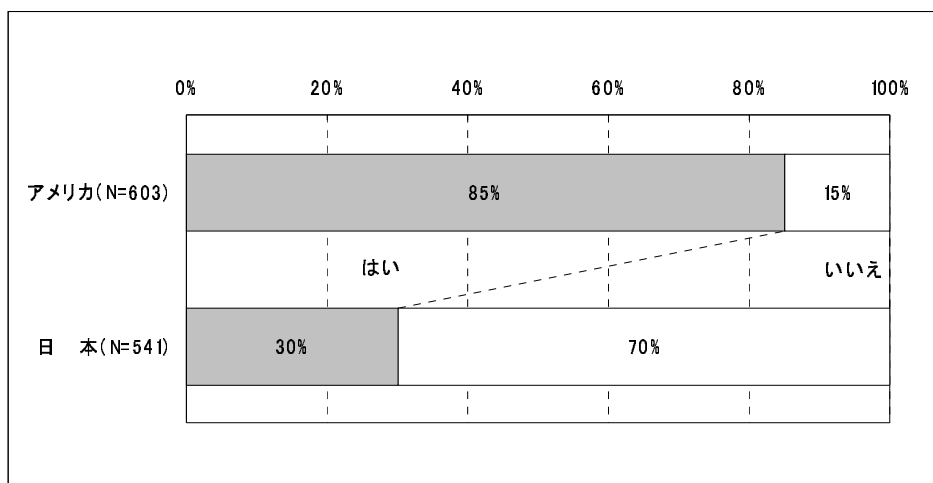
図3-①-④ 親または保護者と話す内容
 <スポーツについて>



⑤麻薬について

日本では「はい」と答えた生徒は30%と、9項目のうち最も低い割合である。これに対しアメリカでは85%と、食事やスポーツと変わらない割合で話している。アメリカでは既に、麻薬は大きな社会問題となっているが、日本ではまだ自分のこととしては考えられない問題なのであろう。しかし他調査⁴⁾によると、平成14年に大麻事件で検挙された少年の数は、前年比8%で増加しており、若年層にとって教育すべき課題の一つとなりつつあるのは確かである。

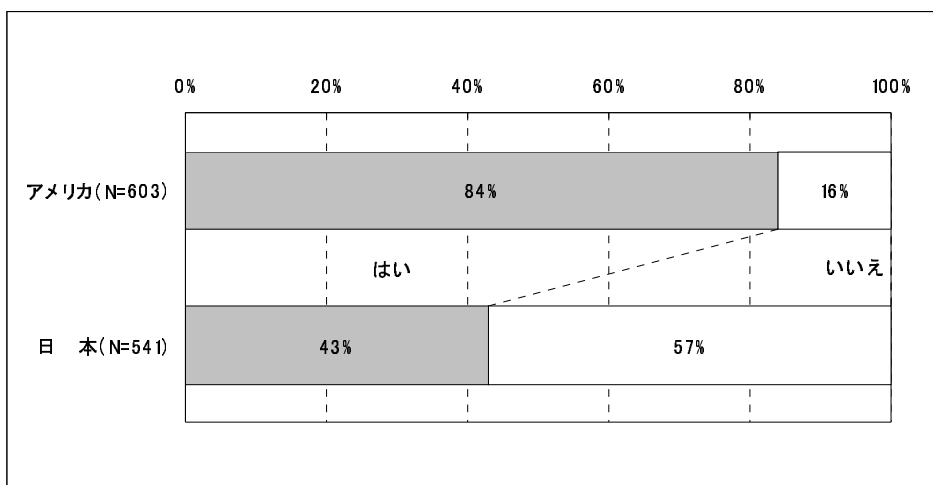
図3-①-⑤ 親または保護者と話す内容
 <麻薬について>



⑥人生の目的について

②の進学のところでも述べたが、アメリカでは84%が「はい」と答えているのに対し、日本は43%しか「はい」と答えていない。人生の目的について親子で話し合うことで、そのために何が必要なのか明確になってくる。どんな進学先が適合しているのか、貯金はいくらあったらよいのかなど、自立に向けての計画に結びついていく。早い時期から、自分が何をしたいのか、どんな仕事に向いているのか、キャリア教育について考えさせることが必要である。そしてそのためにどんな準備が必要か、進学、貯金など合わせて、親子間で話し合うことも重要である。

図3-①-⑥ 親または保護者と話す内容
 <人生の目的について>

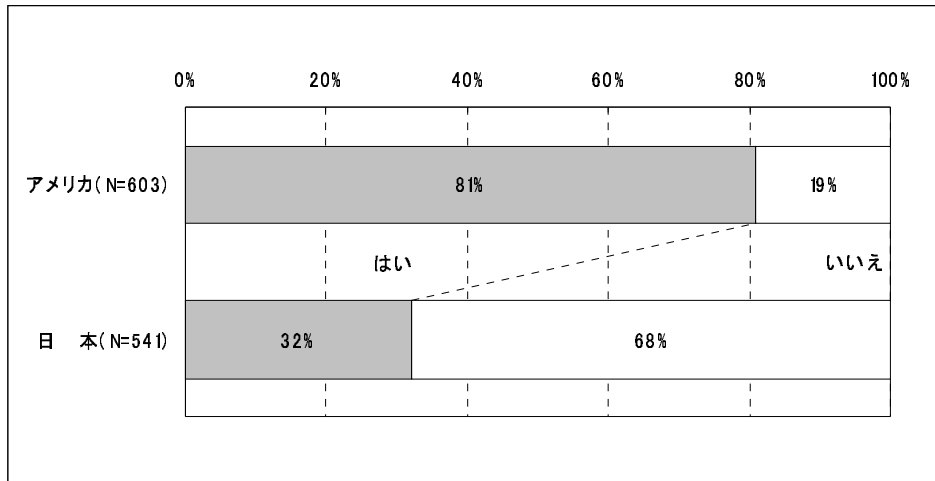


⑦デートについて

アメリカでは81%が話しているが、日本では麻薬に次いで低く32%しか話していない。アメリカでは、親子間で異性との交際についてオープンに話し合っていることがうかがえる。

日本でも性体験の低年齢化が問題になっていて、学校現場でも性教育を行っているが、後悔しない人生を送るためには、親子できちんと話し合うことは重要であろう。

図3-①-⑦ 親または保護者と話す内容
＜デートについて＞

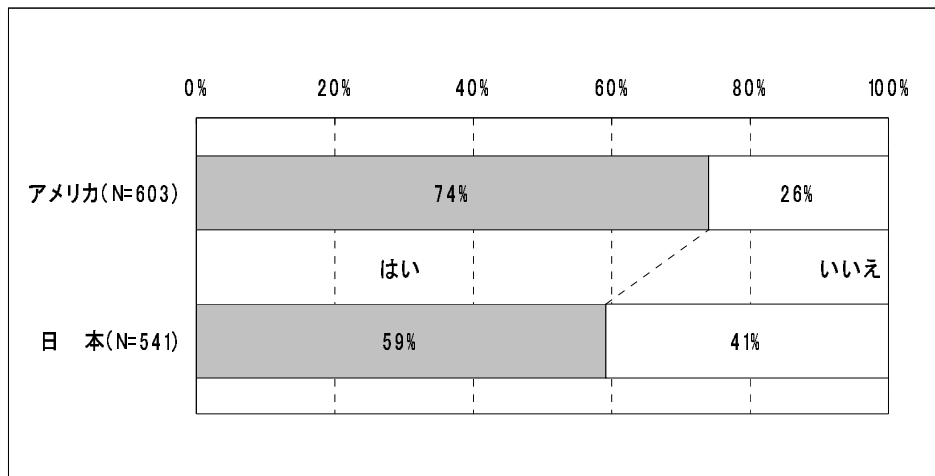


⑧予算化/小遣いの使途

日本の中高生には「予算化」という用語は理解しにくいと考えられ、「小遣いの使途」としたが、アメリカ74%に対して、日本は59%が親と話している。

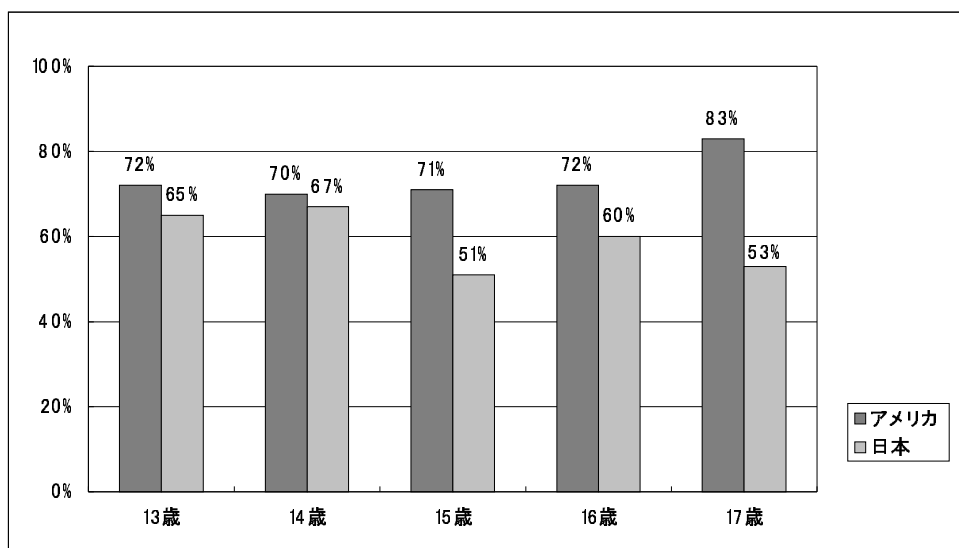
アメリカの調査報告コメント⁵⁾では、「貯金については91%が話しているのに、予算化については74%しか話していない」としている。予算化を当然のこととして（みんなが出来ていなければならないこととして）、子ども達にリテラシーとして身につけさせるところまで求めているのである。

図3-①-⑧ 親または保護者と話す内容
＜アメリカー予算化 日本ー小遣いの使途＞



この項目について日米両国の年齢別データを比較したものが図3-②である。アメリカでは13歳から16歳まで、ほぼ一定の割合で親と「予算化」について話していて、17歳になると83%と最も高い割合で話している。年齢が上がるに従って、手にするお金も支出金額も大きくなるためであろう。また自立に向けての準備も本格的になる時期ということも考えられる。しかし日本では中学3年生の時に減少し、高校では1年より2年の方が減少している。アメリカでは自立に向けて、金銭教育が家庭でも低学年から継続的に行なわれ、いよいよ自立が近くなるとしっかりと話すようになるが、日本では受験勉強やアルバイト体験など目の前の現実的な話が優先され、金銭教育は後回しにされていると思われる。

図3-② 予算化について親と話す生徒の割合



⑨ 買い物時の値段比較について

購買の重要なポイントである「値段比較」は、アメリカの方が高い割合で話している。アメリカが65%、日本が56%と両国の差が最も小さい項目である。日本では中学では50%、高校になると63%が値段比較について、親と話している。年齢が上がると、自分で買い物をする機会が増え、親子間で話されることも増えてくるためと考えられる。

図3-①-⑨ 親または保護者と話す内容
<買い物時の値段・商品の比較について>

